坐樹下
乘入竹林
乘車
乘船

無此比、殿屋震動疑欲顚倒、怖畏無極、仍出寢所、殆及戸外、是心神迷亂之故也、

〔扶桑略記三十堀河〕寛治七年二月十四日辛酉、未刻地大震動、屋内道俗皆怖下庭、

〔清正記〕一慶長元年七月十二日之夜、大地震ゆる事、二百年三百年にもかゝる例を不及聞、日をこえてやまず、洛中、洛外、伏見、大坂は不及申、五畿内押並て地震、京中其外所々に至迄、一宇も不殘倒れ、おしに打れ、死者數を不知、地震ゆると則清正起揚、二百人の足輕に手子を持せ、侍共召連、伏見の御城へはせ行、太閤御座候邊迄被參、はや太閤も御居間を御出座有て、大庭へ出御被成、御敷物を敷、幕屏風にてかこひ、大提灯をともさせ被成、御座所へ主計頭つと被參候へば、太閤は女の御裝束にて、政所樣、松の丸殿、高藏主、其外上臈衆の中に交り御座被成候、然ども御聲せしかば、はや御出被成たると悅、高藏主々々々と主計被申候、誰ぞと答候時、加藤主計頭是迄參たり、大地震夥敷候に、上樣を初、おしにうたれ御座可被成と奉存、はねはづさんため、二百人の足輕に手子を持せ參候通、太閤樣、政所樣、被仰上候へと被申、其聲を太閤樣、政所樣聞召、扨々はやくも參たる物かな、氣のきいたる者かなと、太閤被仰政所樣は主計頭を念比に被成により、樣々の御愛拶なり、

〔百練抄五堀河〕永長元年〇嘉保三年十一月廿四日、地大震、古今無比、人皆叫喚、主上御御船、

〔玉海〕元暦二年〇文治元年七月九日庚寅、午刻、大地震、古來雖有大地動事、未聞損亡人家之例、仍暫不騷之間、舍屋忽欲壞崩、仍余〇藤原兼實女房等ヲ令乘車、大將同之引立庭中、余獨候佛前〇略中法皇〇後白河降庭上、御座樹下云々者、女院又乘車令立庭給云々〇略中主上〇後鳥羽渡御池中島云々、其後又南庭打幄、爲御在所云々、内裏西透廊顚倒云々、

〔源平盛衰記四十五〕内大臣京上被斬附重衡向南都被切并大地震事

同〇文治元年七月九日、午刻大地震ナリ、〇略中同キ十四日ニ、彌益震ケリ、〇略中主上〇後鳥羽鳳輦ニ召テ池ノ汀ニ御座アリ、法皇〇後白河ハ新熊野ニ有御參籠、御花進給ケルガ、人屋ノ倒ケルニ、人多ク被打殺